江戸名所圖會

江戸名所圖會巻之三

天璣之部目録

永田馬場日吉山王神社
成田下総守長泰舊地
第六天祠
平川天満宮
貝塚
栖岸院
寅薬師如来
千手観世音 秦川塔
清水坂 清水谷 柳の井
冨士見坂 御井小路 玉川の泳
櫻田
櫻ヶ井 若菜の井
霞関舊跡
溜池 白山祠 葵ヶ岡
霊南坂 潮見坂 江戸見坂
麻布善福寺 蔵王権現 康島清水 杖銀杏 寺宝
了海上人誕生地
一本松
氷川明神社
七佛薬師堂
霞山稲荷祠
朝日観音
子安薬師如来
祥雲禅寺
廣尾毘沙門堂
光孝天皇御陵 石燈籠
廣尾原
廣尾水車
土筆原 堂沢の里
鷺森神明宮 日限地蔵
氷川明神社 雷電宮
三鈷坂
松秀寺
白金高野寺
覚林寺清正公社
奥雲院 出世観音
梅ヶ茶屋
苑城天満宮
英一蝶墓

寶晋齋其角墓　二本榎覚心寺　清林寺　業敬寺　上行寺　圓真寺

芙林院の圖　正覚院　高野山　丹生高野社　雉子宮

元三大師堂　袖ヶ崎　瑞聖寺　佛殿　勧学寮　三鈷松　天王殿　選佛場　鐘楼　木庫　経蔵　牌堂

白銀妙見堂　[illegible]作観音堂　誕生八幡宮　行人坂　五百羅漢

明王院　子安観音　弁財天　夕日の岡　冨士見茶屋　太鼓橋

蟠龍寺岩窟辨財天　安養院寐釈迦堂

蛸薬師堂　目黒不動堂　別當瀧泉寺　本堂　恵比須大黒祠　経蔵

鐘楼　聖観音　水神宮　開山堂　十羅刹女祠　疱瘡神　地蔵堂　楼門

鬼子母神　子安明神　弁才天祠　前不動

愛染明王　太子堂　虚空蔵堂　粟島明神　観音堂　獨鈷の瀧

八幡宮　大行事権現　六所明神　遮軍神祠　石地蔵堂　勢至堂　垢離場の松

早尾権現　石不動　本地大日如来　結神祠　秋葉権現　稲荷祠　名産飴屋

恵比須大黒祠　稲荷祠　吉祥天祠　役小角　六所明神

地蔵堂　天満宮　三佛堂　荒神宮

虚無僧寺　東昌寺

大鳥明神社　金毘羅権現社　千代ヶ崎　観音

祐天寺　鐘楼　二王門　榎木　圓光大師堂　経蔵　開山廟　寺宝　阿弥陀堂

観音堂　二王門

碑文谷八幡宮　奥澤浄真寺　佛とい　世ふ九品

碑文谷法華寺　本堂　地蔵堂

長泉律院

開山[illegible]上人像　開山廟　星の井　曼荼羅堂　鐘楼　楼門　中品堂　寺宝　上品堂　下品堂　開山[illegible]　開山堂

大平山　満願寺廣澤先生之墓　赤坂御門

赤坂氷川明神社　古呂坂天神社　一ッ木辨天堂

浄土寺　龍泉寺　種徳寺精[illegible]墓

今井古城址　専修寺　一木原　玉窓寺

鳳閣寺　赤根山　圓通寺舊跡　拾ひ橋

海藏寺　梅窓院泰平観音堂　羅漢堂　釈迦堂　百瀬稲荷　虚空蔵堂

観音堂　熊野権現社　[illegible]見観音堂　善光寺　宿寺　信州善光寺

千候塚　笄橋　渋谷長者墳墓

通明観　長谷寺　渋谷氷川明神社　宝泉寺

金王麻呂守佛観音　鶴ヶ谷　朝霧ヶ瀧

渋谷八幡宮　矢拾観音　金王桜　子安薬師　什宝　金王麻呂影堂

同産湯水　渋谷高重宅旧址　姉尾光景旧館地　駒繋松

甘露水　玉池　神泉水　冨士見坂　冨士見橋

道玄坂
土器塚
北沢淡島明神社
若宮八幡宮 田中森女大祠
常盤橋
吉良氏古城址 冨士見松
弦巻郷
氷川明神社
吉祥院
小見村除蝮蛇神符
江戸遠江守舊館地
稲毛重成墓
長者穴

同物見松
足毛塚
池尻村祖師堂
子明神社
圓禅寺
豪徳禅寺 同所 井伊家墓碑
宮坂八幡宮 縁結薬師 廣戸一止之碑
世田谷八幡宮
常刀先生義質之墓
観音寺
韋駄天宮
長森稲荷社

駒場野 蛇池 遠湯松
氷川明神社
子明神社
圓禅寺
徳雲楼 瑞雲閣 吉良氏古墓
龍華山永安寺 同 木宮 松本老松
慶元寺
壽善寺 宿 薬師
泉龍寺 霊泉 鐘塚
升形山
雲ヶ坂

去我苦塚
天満宮
馬牽沢旧跡
常光寺
照光堂 清涼橋
實相院 古城 古碑 十二塔
法華樹 石井氏移塋碑
石井神社
天神の森
氷川明神社
廣福寺
飯室山 七面冨士 浅間祠
薬師堂

大師穴
稲毛薬師堂 影向石
橋明神社 右 遊歩 左 道
登戸宿
同谷
汐干観世音
内藤新宿
一行院
遊女の松 寂光寺境内
千駄谷八幡宮
代太橋
布多天神社

不動権現社
同渡
山王権現社
牛頭天王社
忍原
太宗寺 六地蔵 二番目
古仏弥陀銅像
仙寿院 新日暮
鈴懸松
高井戸
虎柏神社

妙楽寺七面山
十三塚
同神前
最明寺
羽黒権現社
鬼子母神堂
篠寺
天龍寺 一里塚
吾妻堤
龍岩寺 庭中 笠松
代々木野八幡宮
鬼子母神堂
祇園寺 薬師堂

杉山明神社
舟田
多聞寺
大戸明神社
九子渡口
戒行寺 鬼子母神
四谷大木戸
鮫ヶ橋
千駄谷太神宮
千駄谷観音堂
鞍懸松
布多の里
粕江入道旧館地

展翼峰

浅間山

吐玉泉

法泉寺　薬師堂

日吉山王神社　永田馬場にあり江戸第一の大社にして別當ハ天台宗僧正にして觀理院と号す神主ハ樹下氏なり其餘社僧および社家巫女等数多あり御祭禮ハ隔年六月十五日なりその行粧を初巻茅場町御旅所の条下に詳なり

本社　祭神大宮　比叡の二宮小比叡大明神を勧請す垂跡ハ國常立尊にして天地開闢第一の神なり薬師如来を本地佛とす

二宮　氣比宮を勧請す垂跡ハ仲哀天皇にして應神天皇の御父なり聖觀世音菩薩を本地佛とす

三宮　客人宮を勧請す垂跡ハ伊弉冊尊にして白山妙理權現なり十一面觀世音菩薩を本地佛とす江戸名所記に弟三より下の七社の中王子宮本地ハ文殊大士なりとあり

古鰐口　昔ハ本社に掛けたりしものも今ハ右の方稲荷祠に掛くあり径一尺あまり　其銘左の如し

敬白奉納山王權現御寶前鰐口大擅那直景

願主南仙房

武州豊島郡江戸館　天正十四年丙戌十月廿五日

大田大和大工長瀬推名

按ずるに昔ハ山王宮江城の中にありし頃奉納せし鰐口なりしを後稲荷の祠にかけしなるべし古きを存せんがためにこゝに挙るのみ

當社ハ淳和天皇の天長七年庚戌慈覚大師勅によりて武蔵國入間郡仙波にある所の星野山無量寺を再興ありて圓頓の

日吉山王神社

教法を弘めたまひし頃佛法王法護持の為且ハ和光の利益を普く萬民に蒙らしめむと欲して我立杣の日吉山王二十一社上中下の内より一社宛を撰て三所の霊神を彼地に勧請しおひかく星霜を経るも然に文明年中太田道灌此山王三所の御神を星野山より江戸に遷し奉る其頃の社地ハ今の梅林坂のあたりにして菅祠と並ひてありしよし大道寺友山翁の説なり或人云太田家譜に文明十年六月十五日於江戸城内建山王権現堂荒神祠菅丞相祠云々菅祠ハ今の平川天神のよしなり御國初の頃迄ハ両社ともに御城内にありしを菅祠ハ平川口御門の外へ天正より遷され山王ハ御城の鎮守として紅葉山に遷座ましましけるなりこのゆゑ江戸を以て永く御當家御居城の地に定させられし頃紅葉山に移りて新に社を御造営ありて御産神にあがめ給ふ其後御城西貝塚の地へ遷させし其年暦詳ならず江戸名所記に後土御門院延徳年中勅の旨ありて道灌結縁の為三所の御社を城西にうつしたまひ再興修造ありと云云此説未考へず寛永明暦の江戸図みたりて考ふるに其社の旧地ハ井伊掃部侯の北今の三宅備後侯の築宅の地なり菊岡沾涼云山王宮の旧地ハ三宅備後守殿宅の裏の坂に祠あり此所え山王の旧地なりとあるハ実にさもあるべし又事蹟合考に云く伊井掃部頭殿の居館の南後元未申の方の小坂の際に二間四方長十間あまり松杉のすゝしき繁りたる坂の内に稲荷の小祠ある除地是山王一度半蔵御門外にうつされし古跡の由緒と云く

又承應三年甲午回禄の後溜池の築山勝地たるにより竟に台命ありて今の地へ遷座なし奉り宮社御造営ありしより江府第一の宮居となれり名勝志に云く明暦丁酉の歳回禄によりて承應三年當社を貝塚より今の地へ遷し奉るとあれど承應ハ明暦より先の年号なれバ此説證とするにたらず或人云万治元年今の地にうつると云く金殿玉樓ハ天に輝き畫棟朱簾ハ地に映せり名勝志に此地ハ元松平主殿頭殿第宅の地なりしとありしかありしより已降和光同塵の利益浅からざれバ内にハ圓宗の教法を守り外にハ鎮國利民の德を施したまふ殊更御當家の御産土神として御崇敬最厚く天下泰平國家安鎮の御祈禱永世に怠ることなし

成田下總守長泰旧地　永田馬場山王の隣丹羽家の地なりといふ古へ武州忍の城主なり

弟六天祠　同所兼松家の地にあり太田左金吾道灌の勧請なりといひつたふ

平川天満宮　御城西麹町三丁目の南平川町にあり別当は天台宗にして長松山龍眼寺と号け東叡山に属す

傳云当社は文明十年戊戌六月廿五日太田持資当國入間郡川越三芳野の天神を江戸城に勧請し數株の梅を栽ると云　今の御城内平川の梅林坂と唱ふるは其梅林の旧跡なり　新安手簡に文明中太田道灌築かれし江戸城平河口の中営神の社に棟の文に文明十年戊戌六月廿五日と有之云く　其後天正十八年　御入國の頃彼宮を平川口の外へ移さる　支山翁云江戸御入府の節平川より貝塚へ遷さる故に貝塚の天神とも云といへり　故に平河の天神と唱へ奉る　此故に今の麹町の地に至りても旧名を改めず猶社辺の町をも平河町と云　又其後慶長に至て御本丸御造営の頃竟に今の麹町に地を改めさせらる　大道寺支山翁云く平河御門の外は平河町とそのるありしく其平河町の内に薬師堂有て夫より今の麹町の方へ續き昔の甲州街道なり　其別當天神の社を預りて薬師堂のかたはらに遷しまゐらせしに町屋も公用の地となりて麹町の辺へ引もし刻天神の社も共に移すと又縁記に麹町に薬師なりしは八幡宮の小社ありけるを天満宮の社地と定めくらはせしと今に至く旧地の名を改めず天満宮の社内に彼八幡宮も勧請しく文武両道を守らせらると云く

寛政七年修営ありて神殿清新なり　毎年二月廿五日営神自画の神影をかけて諸人に拝さしむ

梅

花無盡蔵云　余比寓武之江戸城々有丞相祠堂栽柳梅松不知幾數百株文明丙午仲春二十有五適植丑之晨寔也之所少也謹賦小詩題丞相之壁上夫徑山之傳衣迦毗茫之説而閲史亦不取之也故未及茲云

北野春遊西肉雲　一篤此地亦插君
夢中傳法定焉有　松亦應云梅亦云

同

書云
遊江戸城菅丞相祠堂
閑闞評花甚不公　若令丞相細分州
独居南面牡丹紅　梅亦應編王着中

宋末江湖梅亦孤　横斜月痩一枝影
吟香白髪老浮屠　分作文公大極圖

同

書云

花下晩歩詩序

身居闞左而名搏海内着太田二千石灌公静勝是也公曽宴坐一室夢中見接菅丞相其昰早有人卒然來献丞相所親筆之畫像可謂靈夢也遂建唐於江戸城之北畔寄數十項之美田歳時鼓焉哉塔梅數百株頗超於錦城之梅花海也前年丙午之春共公遊唐下詩之評歌之講燗燈花前無愧洛社之着英也同秋之孟二十六公逝矣余

平川天満宮

造文祭之今玆丁未正月下浣率數輩之緇侶排
細菅厝追憶前年之遊事豈非夢一覺耶感繫無
措余欲鼓棹皈岐陽未能果漫賦四十言云

移歩一節瘦　餘寒鶯度稀　去年丞相廟　今日故人非
老眼看花落　擧頭疑雪飛　岐陽千里外　山可笑遲皈

貝塚　都て麹町の辺北總名なり此地ハ昔よりの甲州街道にして其路傍なれバ一里塚を土人甲斐塚と呼ならはせしと
なれ或説に貝塚法印といへるが墓ありともいひ さまざまなれども
此地馬場の南ハ芝の青松寺の舊地なりし南向亭云青松寺ハ青松甲斐といふ人の草創なりしを當時玉虫氏の邸にありし貝塚といふ上ハ古碑あり銘文も平氏女とありしに今ハ八幡に祀ると云く麹町四丁目の南乃方に玉虫氏の前なる坂を貝坂といへり一説に此坂の下に甲斐庄氏なりし宅ありし故とかいへり
按に貝塚の地名小田原北条家の古文書に太田大膳亮といへる人一本の内を貝塚の地を領せしことあれバ古くも此地名ありしと見ゆべし然るときハ貝塚ハ一本の内の小名なりしと知べし

村高山栖岸院　麹町八丁目の右側にあり浄土宗にして洛の知恩院に屬せり本尊阿弥陀如来ハ恵心僧都の作開山ハ妙誉真入上人と号ス開基ハ安藤對馬守重信なり昔ハ長福寺と号て三州にありしとぞ當寺に頼朝の念持佛と称せる聖觀音并靈像を安置す（龜前に安置せる小の觀音の像ハ楠正成の守り本尊信の霊像なりといふ）七月十日ハ千日参と唱へて参詣頗る多し

寅薬師如来　同北の横小路坂より上道の左側常仙寺といへる禪刹に安置せり此薬師佛の像ハ行基大士の作なりと相傳ふ往古此靈像永禄の頃迄ハ参州鳳来寺の山麓に立せ給ひしが當寺開山祥岩存吉禪師参州新城にありてはじめて凡俗たりし頃（俗姓ハ安田氏といふ）此靈像虎に化現し給ひ狼の難を遁れしむ依て其後法恩の為に出家し江戸に来りて四谷塩町の明雲山龍昌寺といへる禪林に住せ其頃當寺を闢て此本尊を安置せしとあり毎月八日十二日参詣多し（此本尊ある所ハ此小路を薬師横町とよべり）

千手観世音　同九丁目の右側常栄山心法寺といへる浄刹に安置せり此靈像ハ秦川勝の念持佛なりといへり（閻浮檀金立像一寸八分ありと云）當

常仙寺
寅薬師堂
心法寺
本堂
本堂

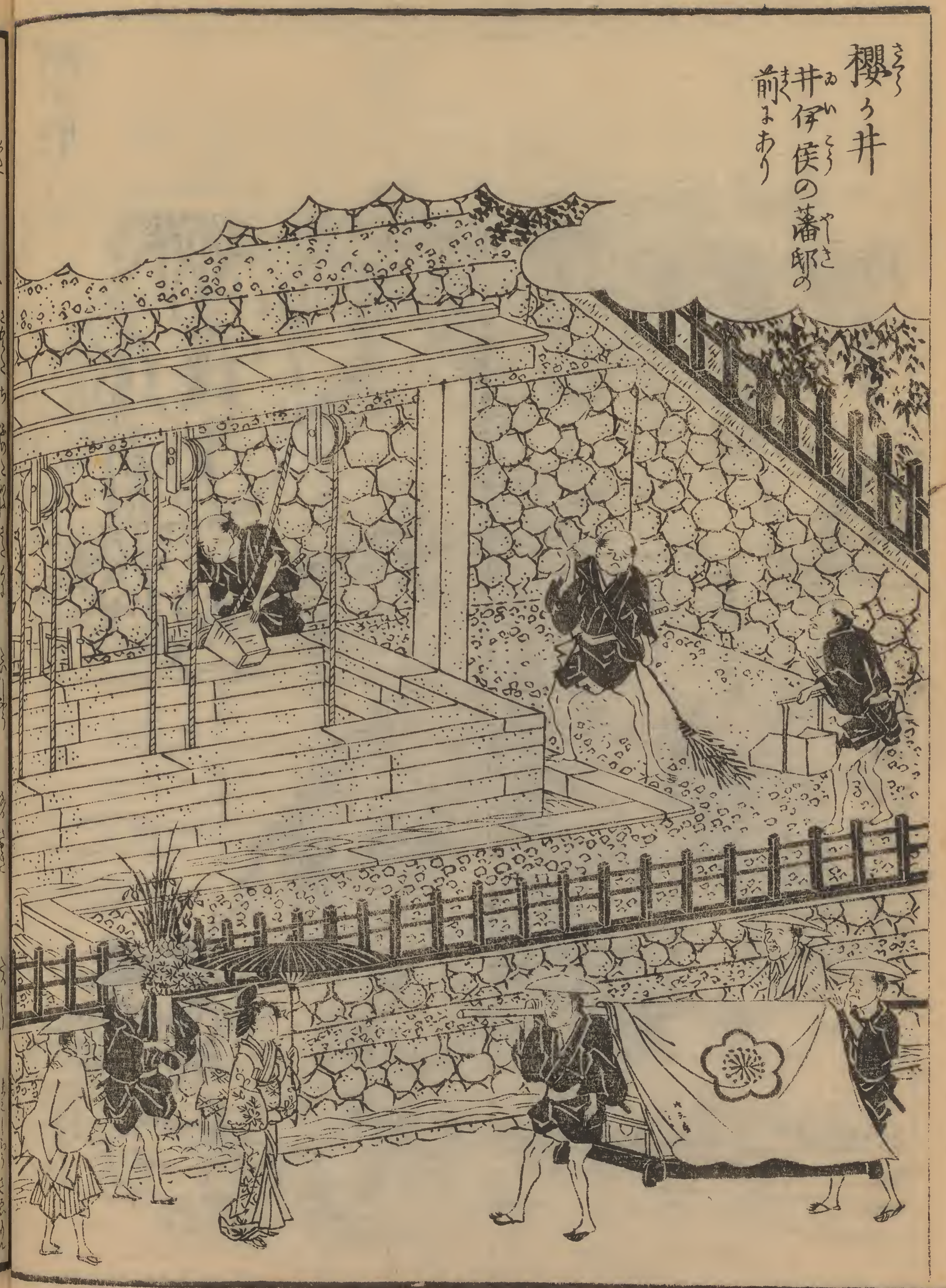
寺ハ京師知恩院ニ属して本尊ハ阿弥陀如来恵心僧都の作
開山ハ然翁上人と号す　當寺洪鐘の銘ニ市谷庄とあり観音堂ニ閻王十王の像あり毎年正月と七月の十六日参詣群集す

清水坂　尾州公御館と井伊家の間の坂を云　清水谷と唱ふるも此辺のことなりとぞ　麹町八丁目へ出る坂下までも清水谷の内なり　此所の井を柳の井と号るハ清水流るゝ柳蔭といへる古歌の意をとりてしかいふとなり　冨士見坂を松平出羽侯の前をいひ　玉川の滝ハ同し庭中にありとも駒井小路ハ冨士見坂の上の方なり　駒井氏こゝに住せられし故に号とするといへり

櫻田　古の郷名なり　和名類聚抄にも荏原郡櫻田佐久とありてしかく其称尤久し　今ハ豊島郡ニ属せり　小田原北条家の所領役帳ニ太田源七郎及び牛込宮内少輔勝行　與津加賀守　會田中務丞等か所領ありといふ　往く櫻田の地名を注しかハ櫻田久保町　同兼房町　備前町の類ひ　まさ今の麻布六本木の南ニ櫻田町と唱ふるあるも同所百姓町等いつまでも御入國の後かしこに地を移されしなりとぞ

武蔵國風土記曰　荏原郡櫻田郷公穀四百六十三束三字田號櫻田者以其郷之岡及野櫻樹多也云云

太平記云　元弘三年五月武蔵野合戦の条下ニ九日軍の評定ありて翌日上總下總の勢を誘ひて後献の後殘ともく鎌倉武蔵守相模五万余騎を副て下河辺

櫻か井 井伊侯の藩邸の前にあり

へ下る一方へハ櫻田治部太輔貞國を大将として長崎二郎高重同孫四郎左衛門加治二郎左衛門入道ハ武蔵上野両國の勢六万余騎を相添へて上路より入間河へ向らるとあり新著聞集に櫻田ハ虎の御門より愛宕の辺迄田地にて畔ほそ櫻の樹幾千本も植ありし田の中の流れを櫻川とのひし今ハ源助橋一ツ印とてのこりしるとかや云々又求涼亭云く櫻田の櫻ハ御入國の後今の吹上乃御庭中へうつされしとぞ云く

按ずるにむかしハ櫻田と称せし地ハ今櫻田御門なと唱へ内櫻田外櫻田といへるあたり山下御門の西虎の御門の外迄の名なるべし其旧跡なるらん歟

櫻か井 井伊侯藩邸表門の前石垣のきはにあり 亘り九尺ばかり石にてたたみし大井なり釣瓶の車三ッかけなるたりも或云事蹟合考に井伊家中屋敷四ッ谷喰違の屋敷とありし若葉井ハ同所御堀端番屋の裏にあり 柳の木をうゑたり故に柳の水ともいへり 清冷なる甘泉なりとぞ

霞関旧蹟 櫻田御門の南黒田家と浅野家とのあはひの坂を云 往古の奥州街道中なる関門のありし地なり 宗祇法師の名所方角抄に霞か関ハ西ハ武蔵にて岳あり東向の所なれハふしハうしろに見ゆ西より河なかれとりをあり 武蔵風土記に荏原郡東ハ霞か関に限るとあり 此地今ハ豊島郡に属せり 北村季吟翁云浮橋をすきて霞村とのふ霞か関の旧地ありといへと霞か村と云地名なし

霞ヶ関

霞ヶ關古圖

武蔵野地名考云或古記曰 荏原郡霞関日本武尊蝦夷之備関也尓来連綿大被置之挙國之勝景而然其遠眺隅雲霞故有霞関之號云云

續千載
わけしらて空に霞の関もなほ弁の盾をしけとらめん　為世

同
いつれか春の霞の関守も色をも月日をとめや八重に　宣子

新拾遺
きゝわたる名のことなくあつま路の霞の関も春そしれぬる　よみ人しらす

新明題
箱の戸よきこしやそら深き鳴あつまのあまて霞こそかゝれ　仙洞

夫木
立わたる霞の関は所名なも幾重かへ白ひそ　亀山院

同
ありまゆく八重に霞の関の名もとゝめさりけりを人に告らむ　慈鎮

同
いまそこゆる関路の花の霞あれ末は露かるむさしのの秋　為守

同
ひまそふそれとそみる桜色霞の関は春のゆかりを　光随

同
空にまつ春の霞は関守りや幾日秋の花をとゝむらん　為氏

名寄
これなくも春のかへりを思へとや関に霞は花をとゝむらん　顕氏

回國雑記
名にきゝし霞の関を越えくれは遠かなるなといひまそくる

溜池白山祠

ためいけはくさんのやしろ

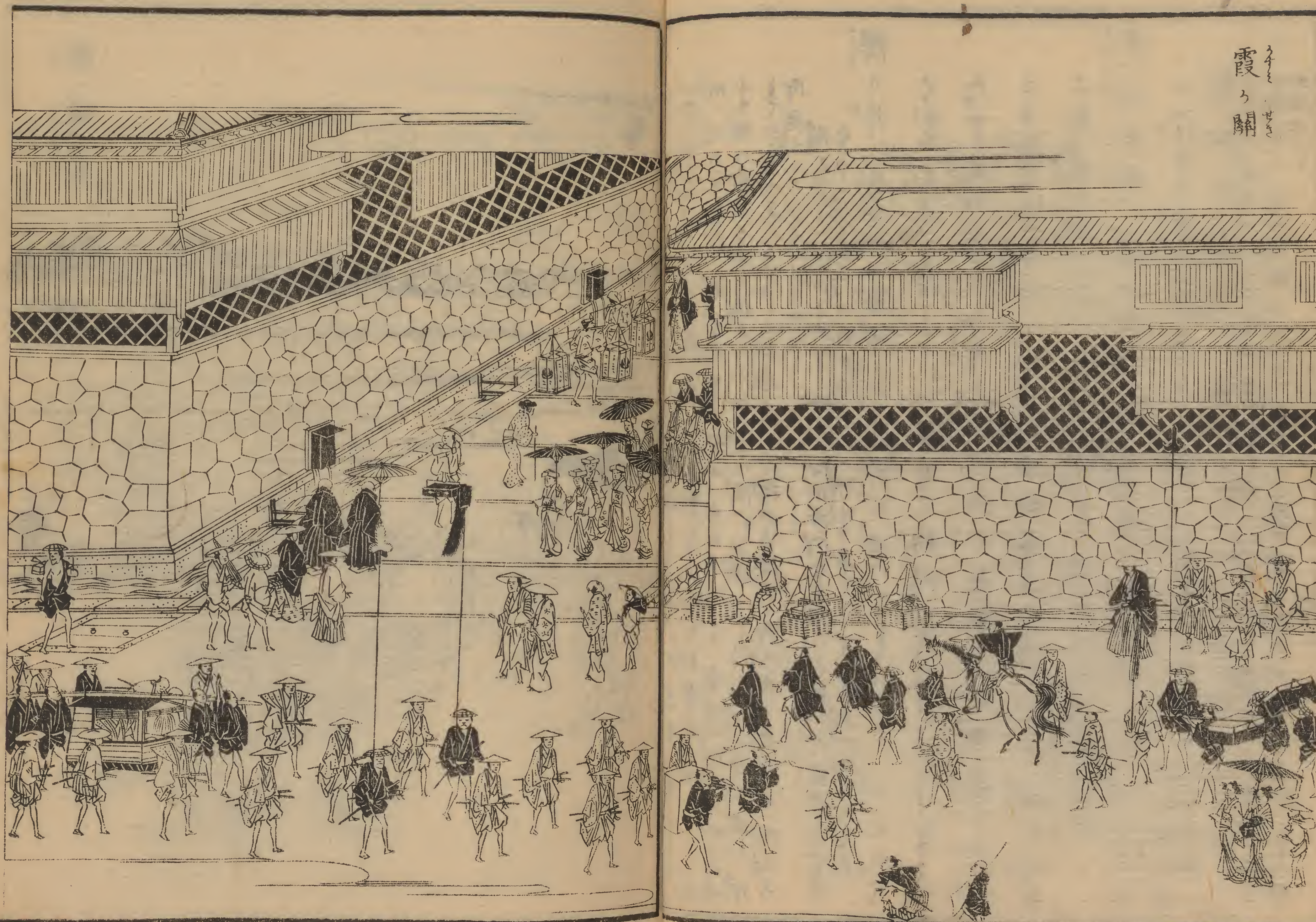
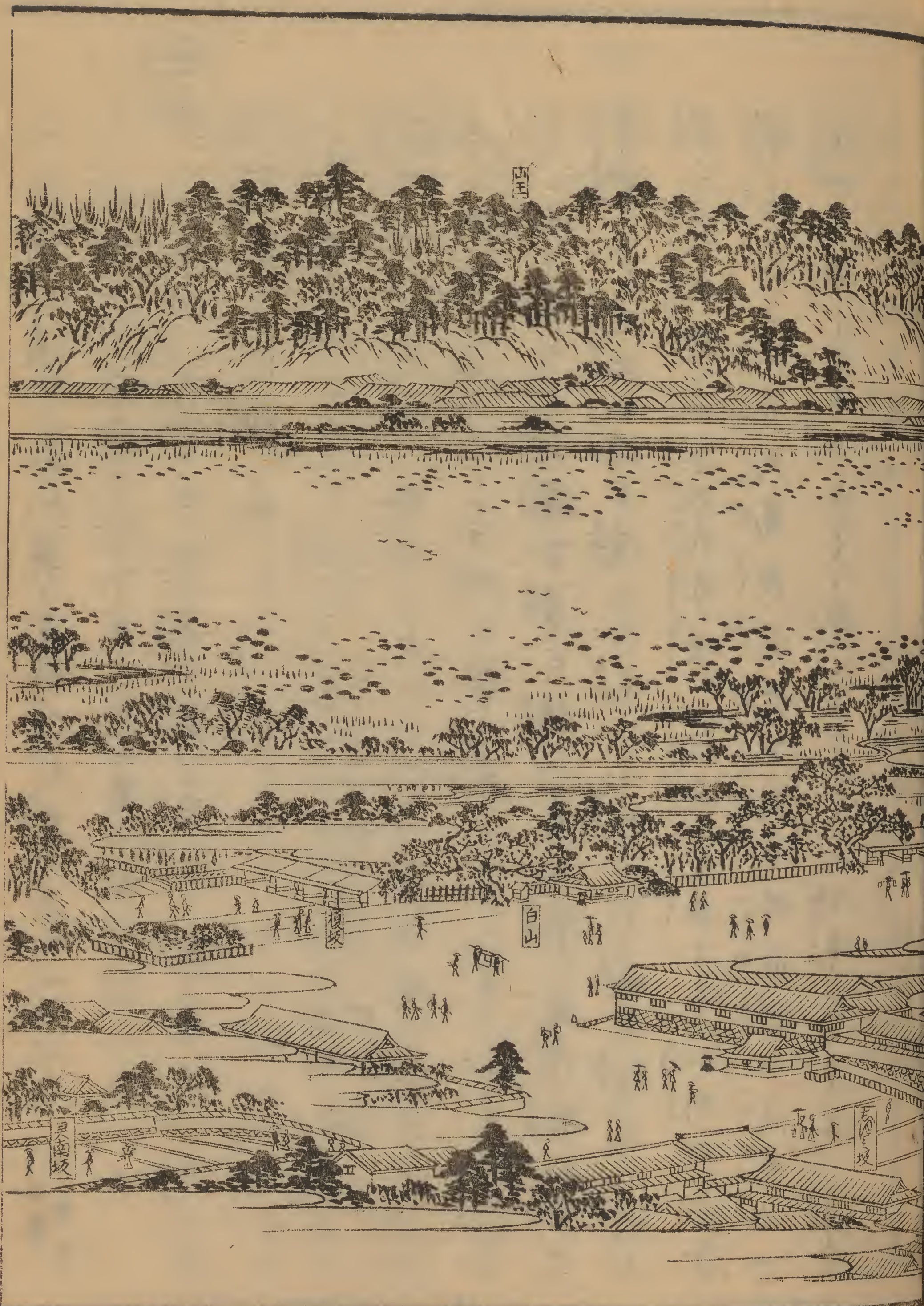
白山大権現

奉納白山大権現

賽銭箱

溜池
山王
榎坂
白山
霊南坂

あか川ま路のゝ菊みち笑ふ手越て我も都ふ立やかへらん　道興准后

都ふとはいそく家をハよそとめし家の笑も表を待らん　同

溜池

赤坂御門の外より山王宮の麓を東南へ繞る昔神田玉川の両上水いまだ江城の御もとへ引せられざりし其以前ハ此池水を上水に用ひられしとかや（寛永明暦等の江戸の圖に赤坂溜池に江戸水道の水源と記してあり俗間此池を狭山の池とするハ大なる誤なり四巻目に詳なり）往古鈞命によりて江州琵琶湖の鮒山城淀の鯉等を活ながら此池に移し放されしかバ其形ちも他に異なり又蓮を多く植られし故に夏月花の盛ハ奇観なりし又池の堤に榎の古木二三株ありしも是を印の榎と名く昔浅野左京太夫幸長鈞命を奉じて此所の水を築止めらる其臣矢島長雲是を司る堤成就の後其功を後世に傳んため印として榎を栽るとなり此堤より麻布谷町の方へ下る坂を榎坂といへり前に述る所の榎ある故なりとぞ又同所堤の北の方辻番所の脇堰の傍に葵を植たる地あり土俗葵が岡と呼ならハせりこの所より東へ向ひて下る坂を葵坂と号く

按に小田原北条家の古文書太田新次郎所領に江戸櫻田池谷といふ地名を注し加ふ恐らくハ此溜池抔の事を云ならん歟

霊南坂

溜池の上より麻布へ登る坂をいふ慶長の頃高輪の東禅寺此地にあり（寛永九年の江戸図によれバ東禅寺溜池の上にあり）彼寺の開山を霊南和尚と称す道光を慕ひて坂の号に呼へるとなん潮見坂ハ同所松平大和侯の表門前に傍ふて溜池の上より東へ下る坂をいふ江戸見坂ハ霊南坂の上よりも土岐牧野両家の北の脇を曲りて西窪の方へ下る坂なり

麻布山善福寺　麻布雑色にあり（昔ハ亀子山と号しけるとぞ）親鸞上人弘法乃地なりし当宗関東七箇の大寺の一員了海上人開山たり亀山帝の勅願本尊阿弥陀如来の像ハ恵心僧都の作なり

麻布（あざぶ）善福寺（ぜんぷくじ）
丙寅春過亀子山善福寺櫻花下吟
獨憐不語無知己
偏向春風索咲多
怎奈遊人凭注目
也應拍手自相歌
心越禪師

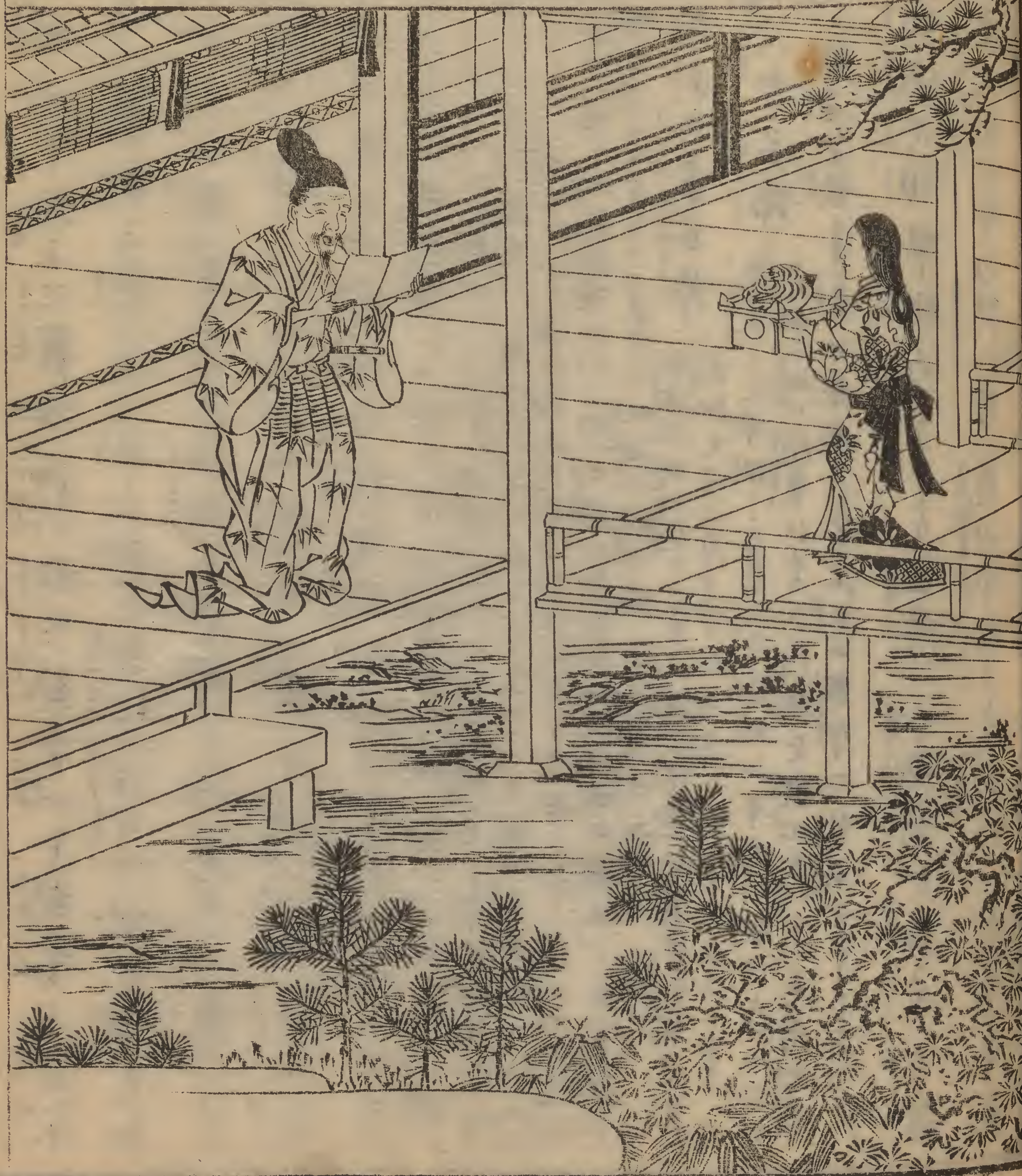
往古ハ南紀の野山に象て草創ありし梵宇なりしが初て真言密乗の勝區たりしが貞永元年壬辰了海師親鸞上人の弘法に歸化し宗風を移す 支院十餘宇あり 小田原北条家の所領役帳に島津孫四郎所領の中に飯倉内櫻田善福寺分とある地名を加へたり當寺のうしろなるべし

蔵王權現堂 本堂の南岳の上にあり當寺の開山堂なるを了海堂とまをす麻布權現とも称す 傳へいふ開山了海上人在世の頃蔵王權現老翁の形に現じ上人にまみえて法義を聴聞しまつりてありがたくおもひ又ある時告て曰く 汝今本願一實の大道におもむく我もとも是を喜ぶ紀念に一面の形を与ふ 汝又自の像を彫造し其胎中に是を収めよとあり 依て了海上人自ら斧を下して自の像を造りて其神告に任せて假面を胎中に収められたりとなり 此地の鎮守と称して毎歳七月十五日草角力與祭礼あり 十一月三日ハ開山御身拭と唱ふる行事あり 則開山忌なり 此日新に水盤を造りて彼木像を浴しまゐらせ平座に安んず 衆僧徒等阿弥陀經を讀誦す

杖銀杏樹 開山堂の前にあり 周りに石垣をめぐらす 相傳ふ親鸞上人了海師に附法ありて後ここを去りたまふの日その携へたまひし杖をもて地に指して示して云く 念佛の弘法凡夫の往生もゆくゆくかくのごとくならんと云く 然るに此杖忽に根葉を生じ竟に枝葉繁茂し蒼々たり 故に逆銀杏樹とも号くとなり

鹿島清水 惣門と中門との間にあり 往古弘法大師常陸國鹿島明神に祈誓したまひし阿伽井なりと 又土人いはく鹿島の地に七井と称する靈泉あれども其中一ツハ空水なりといへり 昔ハ其側に柳樹ありしゆへ一名を楊柳水ともいへりと云く

寺記云 中興開山了海上人ハ鳥羽院の苗裔左大臣藤原信實公の息男なり 信實公故ありて當國に放れ品川の近邑にあり（今の大井村ハ其旧地なり 第二巻大井弘福寺の条下に詳なり）信實公一子なきを憂として蔵王權現に祈請したまひければ 其室白布を呑と夢見て懐妊し建仁元年辛酉林鐘十五日に一男子を誕生す 了海上人是なり（此故に了海上人の幼名を松君と号け 里の名を大井と唱へたり 猶大井弘福寺の条下に詳なり）其時後園松樹の下に忽然として清泉涌出せり 依て人皆奇異とす 此児七歳の春父に告て出離の志あることを願ハせり 故に實相寺の範賢律師に投じ鬢髪を剃除して了海と号く（一書に叡山に登り静釆僧都にしたがひて顕密の学をきはむと云く）是より後數学窓に身を委ね諸宗を濟せ竟に古郷に歸り本願弘興の基趾を求めんとし 則蔵王權現の叢祠に詣し是を祈て靈瑞によりて此地に至るに一精舎あり（今の善福寺是なり）神の敎あることを知りてここに止住し年を歴たり 然るに貞永元年壬辰親鸞上人東國経回の時適當寺に入たまひしかハ海師其

善福寺開山
了海上人
誕生圖

夜試に屈請し談に三蜜論伽六即止観を以て親鸞上人是に
答ふる事響の音に應するかめし竟に念佛往生の理を論するに
至て海師直に親鸞上人の弘法に帰降し師資の約厳かして
是より宗風を轉し化を布す遠近に普し　直弟六老僧の随一と称す　後永仁
二年甲午十一月六日前念命終後念即生の素懐を遂られたり
以上寺記及ひ二十四輩霊場記の意を採る佛光寺の実録に云く了海上人ハ元應二年庚申正月廿八日八十二歳にして寂す武蔵國阿佐布善福寺と号す延應元年誕生廿四歳の時祖師圓寂云く傳燈系図元應二年十一月六日寂又大谷遺跡録に云高祖滅後十六年弘安元年四十歳の頃與正寺に入弟四世の寺務となり永仁五年願念誓海に寺務を譲て武州麻布に下る五十九元應二年の春正月化縁の薪尽く廿八日即生後念の素懐を遂たまひけりとありく化寂の時世違へり可考のこと

弘法大師刷毛書名號　弘法大師入定したまふ前の年再ひ當寺に来てまのひ今ま猶傳へて當寺に存す　承和元年三月十五日空海書と染筆しありとあり

親鸞上人八字名號　親鸞上人帰洛しありし後海師一年都へ登り上人に謁せ上人云く汝ハ關東にありて門徒を教化まへしとて南无不可思議光佛と輸墨を灑き是を海師にたまふ當寺の什宝となせるとそ

當寺ハ弘法大師草創あまりしより已降一千餘歳を経る古藍
なり殊更文永三年の秋八月亀山帝勅して願寺となさしめられ
鸞伸一貞詔璽及ひ俸田を賜ふ境内に古墳多く最古跡なるを
明けし今一向専修の宗風盛にして化導遠近に普し

一本松　同所北の裏通り一本松町道の傍にあり一株の松に注連を
懸其下に垣を廻らせり里諺に云く六孫王経基此地を過る頃此
松に衣冠を懸たりとて冠松の名ありとも其餘さまざまの説あれとも
分明ならす今此辺を一本松と号して地名となまり或云小野
篁か植る所なりとも
按に氷川明神の別當徳乗院より此松樹の注連をかけらるゝなり息ふに或人いふ此松ハ氷川の神木なれとそ此説是なりされと昔の松ハ枯て今者木を植置り

氷川明神社　同通り南の古上野町道より左側にあり麻布の惣鎮
守にして祭礼ハ八月十七日なり相傳ふ文明年間太田道灌當國
一宮氷川明神を勧請せる所にして旧地ハ同所宮村の切通坂に
ありしとなり別當ハ真言宗にして徳乗寺と号す　同所長坂にあり又古老云昔の二鳥井ハ三の鳥井ハ今の狸鳥井坂の地なりしとそ其旧地今ハ縁山の住持退隠の地となれり
露白和尚寛文二年の九月まして此地に隠栖ありしとなり其頃今の所へ社を

麻布一本松
長傳寺

うつせしなるべし元禄の江戸図にも麻布明神とあり

七佛藥師如來（或ハ神田藥師と云）麻布本村町の南坂の下リ口左側医王山東福寺といへる天台宗の寺内にあり縁起に云く本尊藥師如來ハ傳教大師の作にして七佛の其一員なりそのゝち六孫王経基の持念佛たりしが永承年間頼義朝臣鎌倉へ移され後代々の官領崇敬あり然に長禄の頃太田道真當國河越の城中に安置し又文明に至り其子道灌江戸平川に移せり然に慶長五年大神君關原御陣の砌慈眼大師に命せられ此本尊に御祈念ありて巻數を献る（今此例年正月五日九月御札を献す）同九年神田の臺に移さる（其旧地今の駿河臺）又其後下谷廣小路にて地を賜ひしとぞ（紫の一本に廣小路の藥師戌の年の火事以後南藥園へ移るとあるハ此藥師のことなり戌のとしとハ天和二年壬戌のことなるべし下谷にありし頃ハ崇源院殿の御建立なりしとぞ公家の記に天和二戌年十二月廿八日類火に逢御用地となり麻布御藥園に移さると云）竟に貞享元年今の地へ移されしとの其旨趣を慈眼大師の真筆を添られし一軸の縁起あり當寺（正月八）

仙波喜多院に属せしが慈眼大師の時より上野に属せり

霞山稲荷明神祠　櫻田町道より右にあり往古ハ櫻田霞が関にありしを御廓定まりし頃今の地へ移されしとなり別當ハ天台宗にして霞山櫻田寺觀明院と号く本尊吒枳尼天像ハ足利義國の守神にして行基大士の作秩父重康安置せりと云相傳ふ當社ハ渋谷荘司重國勧請し文明中道灌再興せり又往古右大將頼朝卿櫻田村にて美田五百七十石を寄附ありて供田の印に櫻樹を植要害を構て江戸太郎重長をして往來を改めしむ其後遂に年月を歴て此地と共に社を麻布へ移されしとなり（今麻布櫻田町百姓町抔号くハ則櫻田よりうつせし）

朝日觀世音（一町なり）同向側専稱寺といへる浄家の精舎に安置せし本尊なり觀音の像ハ長者が丸の叢より出現ありし故に作者何人なるを知らず當寺ハ三光院清心尼の開創ありし寺院なりしとく

七佛藥師
氷川明神

本尊も又此尼の尊信ありし霊佛なりといへり（清心尼ハ織田信長公の侍女なりし筒井の順慶か姪なり薙髪して後増上寺第十六世深誉上人の弟子となる）

子安薬師如来　同南に並ぶ真言宗正光院といへるに安置す本尊瑠璃光如来の像ハ恵心僧都の作なりし一條帝御降誕の時の御祈願の本尊なりしと云傳ふ（北条家所領役帳に奥津加賀守櫻田の内平尾の地を領すとありこれも櫻田に属せしと覚ゆ）

瑞泉山祥雲禅寺　廣尾町にあり花洛大徳寺派の禅刹なり本尊ハ釋尊を安置せり開山ハ龍岳大和尚開基ハ松平筑前守長政なり（祥雲ハ則其法号なり）支院八宇あり（昔ハ赤坂の藩邸にありしか麻布谷町の上の方へうつし竟に明暦四年今の地に引とぞ）

毘沙門天　同所四丁斗巽の方渋谷川の北岸多門山天現寺といへる禅刹に安置せり本尊毘沙門天の霊像ハ樟の丸木作にして聖徳太子の彫造なりといへり（其丈三尺一寸）相傳ふ多田満仲の念持佛にして源家累代守護の霊像なりし傳通院殿深く

廣尾
祥雲寺
本堂
客殿
庫裡
鐘
塔中
経堂
惣門

廣尾(ひろを)
毘沙門堂(びしやもんだう)
弁天
天神
鐘
光孝天皇
御陵石燈籠
毘沙門堂
別當

尊信ましく安部攝津守信春に御預ありて其後仙石因幡守久信の家に傳へ又祥雲寺に収め竟に當寺を開創し始てこゝに安置せり 本尊来由の記ハ林学士信充先生の文章にして當寺の什寳にあり

武州豊島郡城南麻布邑多聞山天現禪寺毘沙門天王縁起

從五位下守大學頭林信充誌

毘沙門者北方天王而號多聞也西土以北方爲上此王福德之名聞四方北方多聞之名乃明著矣護四埵之水精埵將諸閑又衆無量百千以爲眷屬也有一尊像于此相傳我東照君　尊母公傳通院殿祈參州鳳来寺峯藥師時十二神之中寅神應靈夢之祥　君以寅歳降誕也故因　母公之訓命崇尊焉蓋聖德太子以楠木手自作之其長三尺一寸　源家嫡流贈正一位滿仲公所傳來尊像也良有以哉　君之崇尊也慈眼大師書東照大攉現守御本尊之九宇于抜木傷其筆痕今尚存矣　君每臨攻城野戰無不攜行此像也拔群超類撥亂反正掌握天下安撫海内者乃此像之威德也唐天寶年中西京府之闔臨危而誦仁王靈語見神以五百負且見金鼠吹歆詟弦皆絶矣哉道中西川現僧相天王者皆此靈所成也倭漢雖與所其信從識同矣　君傳長久之業而閒太乎之基者可謂非人功之所及也歟後近世安部大藏信恭奉命預香華供養之事信春亦以寅歳奉護之也嫡子彌市郎信包亦寅歳而愈恭仰不趣也信包嘗衛護大坂城之初年鎮坐其城内也歷年之後　官命無及此像吏故於江府品川私第揄地建堂自茲任攝州剌史官祿增益齡過九十旬其曾孫信峯任丹波剌史尚猶傳之然有故贈仙石壹岐守久信傳之尚矣平生通志于祥雲寺怡谿和尚甚厚也久信安見迁座之靈夢數多也久信恥使介告怡谿曰靈像頻有靈夢且有俗家不堪恐懼也怡谿任其志移之寺内法子良堂和尚感其像之重其驗之大新建天現寺安此像于一堂以祈妙驗矣頃間請僕記其来由不能黙止云爾

毘沙門天王縁起終

光孝天皇御陵石燈籠 毘沙門堂の前左の方にあり御影石の燈籠にして甚古雅なりいつの頃かありけん金森家より寄附ありしといふ

土筆ヶ原 渋谷川の南の原をいふ名とく此辺を豊澤の里と呼へり上中下にわかちて渋谷の地に属せり

鷺森神明宮 同所相摸殿橋より南の方田島町の右にあり別當ハ天台宗にして報恩寺兼帯す祭礼ハ五月廿八日なり相傳ふ後冷泉院の御宇頼義朝臣東征凱旋の時白旗を収め祀るといふ

廣尾原（ひろをのはら）

廣尾（ひろを）水車（みづぐるま）

氷川明神社　同所南の方三鈷坂の下東の通り右側にあり白銀の鎮守なりとぞ祭礼ハ九月十九日なり傳へ云日本武尊當國一宮氷川の御神を遥拝したまひし旧跡なりとぞ

雷電宮　同社地より北に並び相傳ふ白河院の御宇當國疫疾流行す氷川明神の神詫あるによりて此御神を勧請すと云千手觀音を本地佛とぞ

冬嶺山松秀寺　同所東の方一丁斗を隔つ相州藤澤清浄光寺の末寺なりしく時宗の道場なり昔ハ武州高井戸にありて常光寺とのひ遊行上人の宿寺なりしを宝暦二年壬申此地へ移れり其時より松秀寺と云中興開山ハ遊行五十世快存上人と号す

延命地蔵菩薩　當寺に安置も徳一大師の作なりしく頗る霊験あり祈願ある輩日数を定めこれを念ずる故に道俗日限地蔵と称せり常に詣人絶ず

最正山覚林寺　樹木谷道より右にあり日蓮宗にしく房州小湊の誕生寺に属す元禄年中の開創にして開山を可観院日延上人と号す小湊十八代の貫主にして[illegible]相傳ふ昔加藤主計頭清正朝鮮征伐の時彼國の王子連枝二人を日本へ連られし沙門となし兄をハ高麗日遥上人と号し肥後國本妙寺の開山とし弟ハ則日延上人是なり當寺に清正の画像一幅を蔵す生前自画かれしとなり毎歳六月廿四日祭祀を正五九月も廿四日毎に神前において千巻陀羅尼を読誦す武運をいのる輩利益をかうむりしといふ又清正朝鮮征伐の時兜の内に籠られし釈迦如来の像并朝鮮國より軍[illegible]を申送られし書簡等何れも開山上人當寺へ収られしとなり

龍吟山奥雲院　同所坂の上にあり曹洞派の禅林にして芝二本榎廣岳院に属す

本尊十一面観音世に虫喰観音とも称す西方廿五番の札所なり縁起云聖武天皇の御宇稽文會稽主勲和州長谷寺の観音を彫刻なし奉りし頃其餘材を以観音の像七躯を造立し所々に安置す當寺の本尊其一なりしく長一寸八分あり然に上杉謙信此本尊を髻の中に収られし度々の合戦に勝利あるゆゑなりとる信大方ならす又謙信旅僧より立像

鷺森神明
西光寺
氷川明神
西光寺
弁天

梅ヶ茶屋
三鈷坂より左の方
白銀氷川の社の
側にあり一年遊行
五十二世佗阿一海
上人此家の梅を
愛たまひ一首の
和哥を詠せらる
白梅なるを床梅と
号くとぞ二月の
芬芳まさる
世に越て高し
美艶仙女香

二尺の千手大悲の像を附属せられけりしにより先の小像を
其佛胎の中に籠られしとなり往昔佛工定朝信州善光寺に
参籠せし頃彼寺焼亡せしも其時灰燼の中に一本の柱焼残りてく
あり寺僧に問ハ此柱ハ虫喰の柱と称して當時初建立の時老
翁此木を負来りて西の柱とせへしと云終りて後其行方をしらず
然に件の柱より夜々光明を放つ中に虫食りて跡自然に文字
をなせり

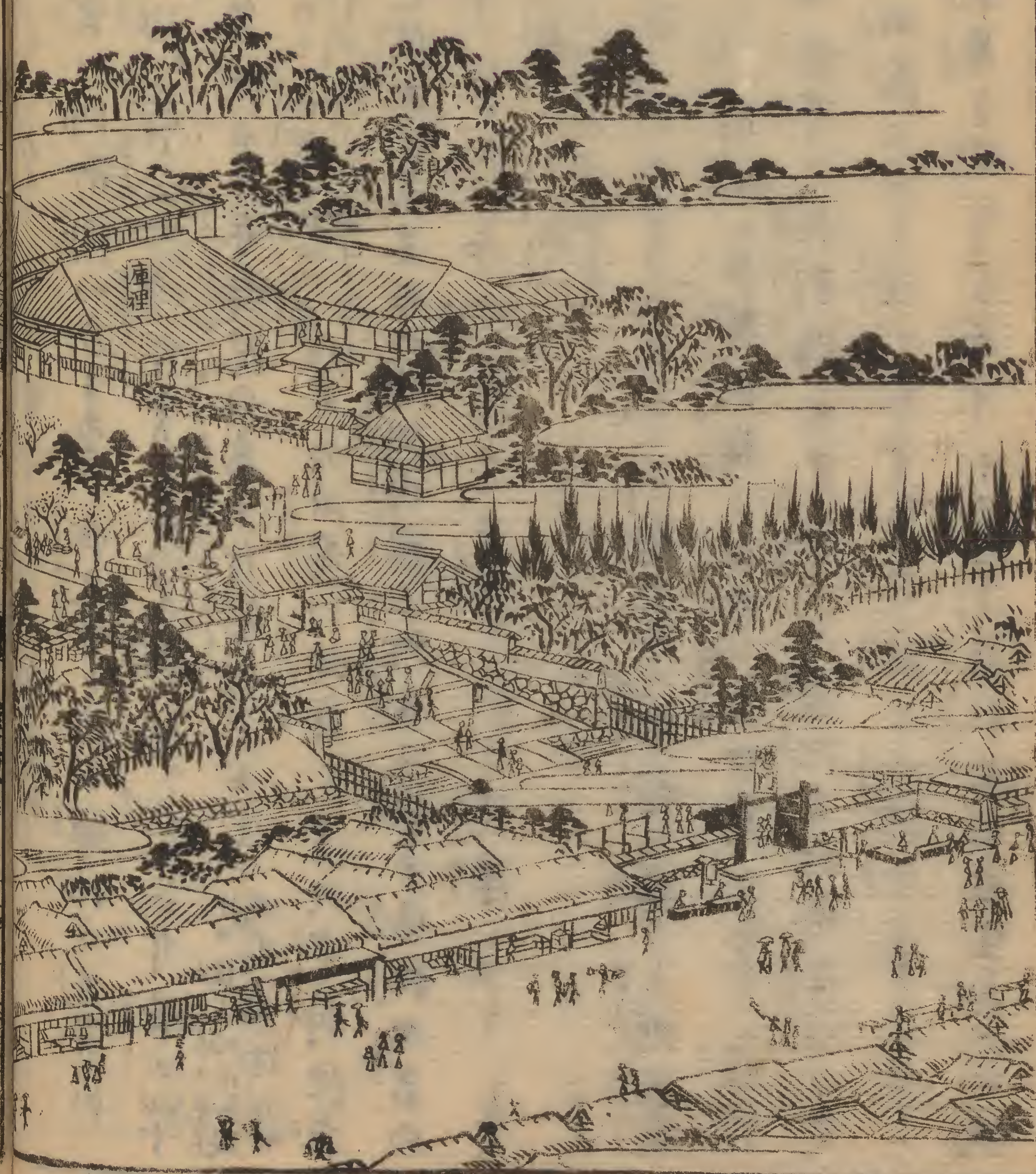
待儀て根もと去ゑ皆人のみのりをいのりて急かさりん

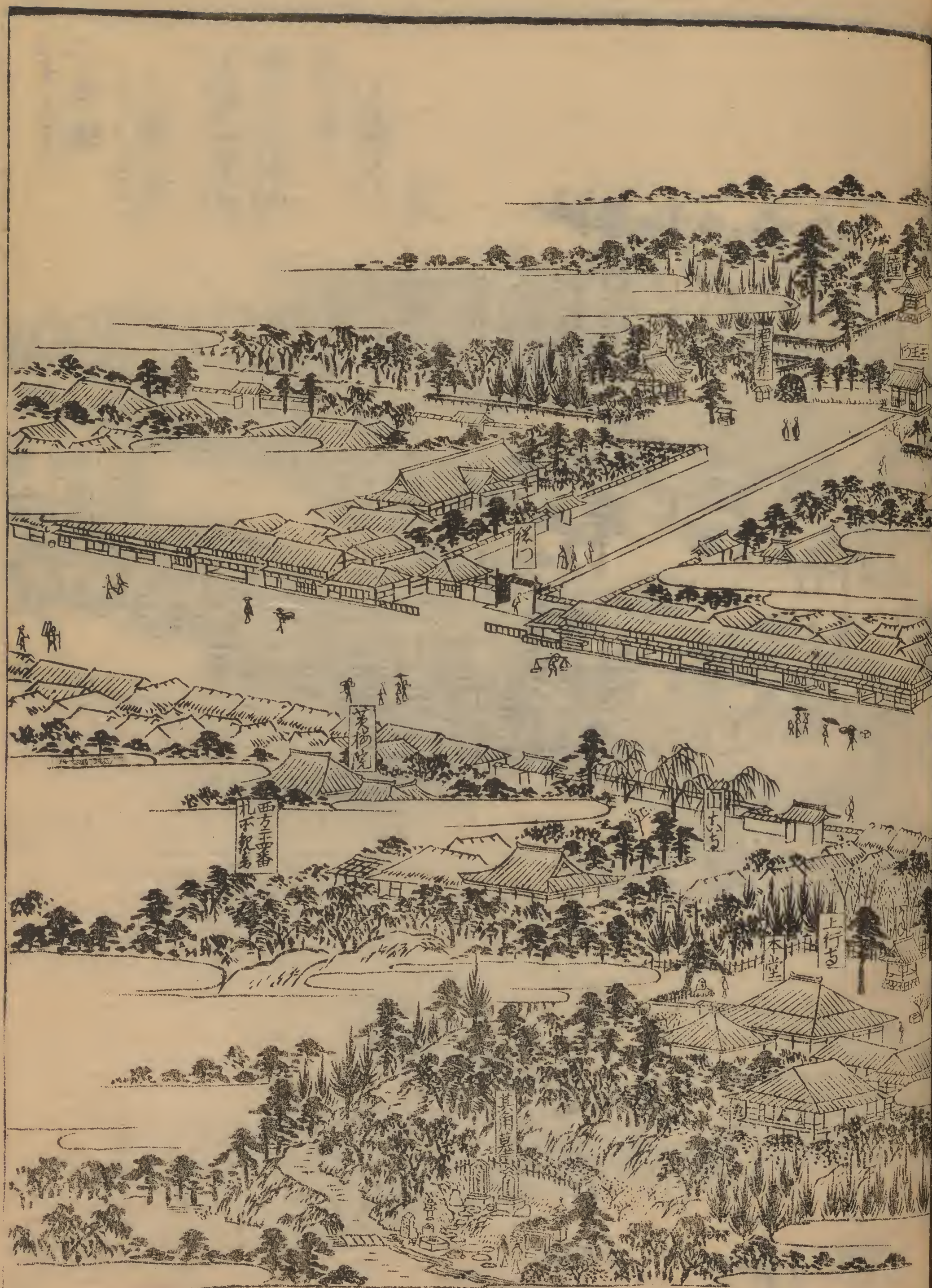
となり依て虫食の柱とのみを此柱三度迄焼亡の其火災を除れて
今に存して今又やりと語伝たる然るに其夜寺内の僧徒皆夢
みて此柱を以て像材とし佛工定朝をして観音二躯を彫
刻せしめ一躯ハ善光寺にとゞめ一躯ハ笈に移しまつり結縁の為
定朝に自ら脊負しめ諸國を経歴せしむ故ありて上杉
家に傳りてありしを後當寺に遷し奉るとの事

花城天満宮 同所南の方にあり松久寺といへる禅林に安置す
神躰ハ御長三寸八分 菅公の御作なりといへり相伝ふ仁和二年菅公四十
二歳になりたまひし春除厄の為に自彫刻しまへり（十五歳の時法華を成就の為に造らせ）
（御丈一寸二分の十一面観音大士の像を以て暖蓋とす今ハ別に安置しまつる） 又云此像ハ延喜元年大宰帥に左
遷せられし彼地に至りたまふ頃河内國土師里に在せし御叔母君の
方へ立寄らせ給ひ御記念のとて授けられし肖像なりとぞ
（文禄の頃加藤家の臣山田氏其より當寺に安置し奉りしとぞ）

英一蝶翁墓 同所より二町ばかり南の方二本榎の通り左側承教
寺にあり一蝶翁姓ハ多賀氏諱ハ信香一名を朝湖といひ暁雲
翠蓑隣樵等ハ其別號なり幼より畫法を狩野安信に受く
尤新意洒落なりしが後一家をなせり然るに元禄中事に坐して
豆州三宅島に謫せらる居る事十餘年其技益進む宝永乙丑赦

松秀寺
本堂
日限地蔵
庫裡
地蔵
六地蔵

白金高野寺
高野山在番所行人方旅館なり
本尊は弘法大師なり
不動愛染釈迦歓喜天弁天も
八十八ヶ所の札の打留なり
丹生高野社
本堂
西在番所
東在番所
鐘楼
表門

免ありて江戸に帰るに於て始て名を英一蝶と改め北窓翁と号す夫より後ハ畫く所の尺絹片紙人爭ひ求めて宝とせり享保甲辰正月十三日享年七十三にて卒す翁生前に作る所の朝妻舟畫讃及ひ朝清水記等世に傳へて賞美す俳師芭蕉其角と同時の人にして明友たり

寶晋齋其角翁墓　同向ふ側上行寺といへる日蓮宗の寺境にあり其角姓ハ竹下父を東順といふ（江州堅田の人榎本といふ医を業とす）其母の姓なり儒ハ寛齋先生に学ひ詩ハ大巓和尚を師とし書ハ佐々木玄龍の教を受て自一家の風あり医ハ草刈氏某に就て術を得画ハ朋友英一蝶に倣ふ延宝の末より芭蕉翁の門に入て俳諧を学ひ竟に名をなせり雷柱子狂雷堂有竹居六蔵庵善哉庵文庵及ひ螺舎渉川等の数号あり晋子とハ其戯号なるへし幼稚の頃堀むら池に住後

花城天満宮

覚心寺（かくしんじ）
清林寺（せいりんじ）
衆敬寺（しゅうけいじ）
上行寺（じょうぎょうじ）
圓真寺（ゑんしんじ）
黄梅院（くわうばいゐん）

二本榎
正覺院
高野山学侶派の在番所なり
世ニ高野寺といふ
無量院
明王院

堀江町に移る又芝の神明町茅場町等にも庵せし事あり五元集其余の俳書にかくいへり宝永四年丁亥二月晦日卒す享年四十七著す所の俳書凡二十餘部各世に行はる

高野山宿寺　正覚院と号す真言古義の觸頭なり世俗高野寺とのみ称せり同所南の方一丁許にあり本尊ハ弘法大師の像なり（四十二歳にあたらせ給ふ時大師自ら作り給ふといふ）門を入て本堂の右の方に丹生高野両神の祠あり又堂前に三鈷松あり毎歳三月廿一日御影供を修行せり

雉子宮　同所猿町の坂口にあり（此辺谷山村の内なり或云官家の書に北品川領大崎云）慶長の頃御放鷹の時此社へ雉子一羽飛入たり其時神名を問せられしに土民山神の祠なる由申上るれハ已後雉子宮と唱へ申へきの上意ありしよりかく号くるとなん祭礼ハ毎年九月十五日に修行せり別当ハ宝塔寺なり

鳥のな　雉子の宮なく
かりにくる人もなきしの宮里を宿さるむらん　茂睡

按に当社ハ武蔵国風土記に所謂荏原神社なるへし同書に荏原の神社ハ祭神天手力雄命にして天智天皇六年始て神礼ありと記せり当社を山神と称する八旧より信州戸隠の御神を祭るゆへにもあらんか

元三大師堂　同所白雉山宝塔寺といへる天台宗の寺院に安置す当寺ハ則雉子宮の別当なり本尊ハ東叡山の元三大師の画像と同筆の真影にして霊威照々たり例月三日開帳あり此辺を大崎と云古へハ海濱にて此地より東の方品川辺の間袖の形に似たりとて袖か崎とも呼へり

紫雲山瑞聖寺　白銀台町にあり黄檗派の禅林にして寛文年間木庵和尚開基たり（鐵牛和尚も当寺に住す）仏殿にハ釈迦如来脇士ハ迦葉阿難等の像を置り毎歳七月十五日大施餓鬼あり

前銘并引
武蔵州荏原郡三田庄白金村新開紫雲山瑞聖禅

雉の宮
本社
庵
元三大師
宝塔寺
本堂

寺去城二里餘其地廣莫前朝東海後接目黒然其
所唱始者青木甲斐守端山居士之竭力矣至於山
門大殿方丈及左右大小寮舎背端之諫緣而所建
立也然非夙植大根安能捨身財之若是哉慈長松
院捐金鑄洪鐘以鎮山門託此勝因追薦嚴父空印
老居士慈安心光院夫人以助冥福而起妙樂并及
幽靈村野等䰟特請爲銘如斷功德不可思議即不
辭才拙謹爲其銘

銘曰

須彌作炭　大地爲爐　鑄出洪鐘　內外空虛　圓音普徧
扣擊聲舒　聞之發省　妙悟丸祛　幽冥超脫　真性還初
十方法界　同證無餘　若是功德　至大奚如　存者往者
福寧永於

寬文十一年歲次辛亥孟春穀日
開山嗣祖沙門木庵瑫謹銘

再鑄銘并引

維時延亨二歲次乙丑春二月罹回祿堂宇燒燼洪
鐘湧鎔矣籍是山僧發志願募諸方而今再鑄焉

銘曰

一火鑄成一巨鐘
長昏扣擊解煩夢
敎體分明無漸次
國家悠久民安泰

斬新禮樂古禪叢
冥苦息除證法空
音聞清淨尓圓通
永鎮山門化令隆

延亨二同歲中秋吉旦
十四代住山嗣祖沙門明祖眼謹誌

鑄工　小幡内匠　藤原勝行

佛殿　額

二重家根の軒に掲く　釋迦佛を安す

大雄寶殿

臨濟正傳三十三世黄檗木庵瑫山僧書とあり

延宝辛酉吉旦　開山木庵瑫書とあり

瑞聖寺

聯　天王殿の左右の柱に掲ぐ　木庵瑫書としるしあり

鐘樓

開山木庵書あり

鐘樓　佛殿の右にあり　堂中に文珠觀音等の像を安す　銘文は木庵和尚撰する所なり

経藏　佛殿の左に並ぶ　内に楞嚴の釋迦如来の像を安ず　瑞聖寺の昔の本尊なり　傳大士の像もあり　この経藏は延宝八年下谷池端鐵牛の元祖了翁僧都の建立なり　唐本の一切経を収む　稲葉美濃守正則寄附せらるゝところなり　その余書籍すべて五千余巻を集め置く

勧学寮　経藏の傍にあり　二間に五間　其中五局に儲けて一宇を建披覚学者のため是を置となり

選佛場　同所に並ぶ　内に開山隱元禪師の像を置　左右の柱に聯を掲く

木犀　佛殿の前左右にあり

瑞聖寺　額　軒に掲ぐ　寛文辛亥正月吉日立　開山嗣祖沙門木庵書とあり

天王殿　佛殿の前の方石階の上にあり　内に径山寺の布袋和尚及び帝釋四天王等の像を置り

額

紫雲山

聯

門開長見江山靜
地勝不嬌車馬喧

聯　同堂内の左右の柱に掲る　壽山の書

紫雲堆裏現慈容
瑞聖門中輝妙相

節竿旗　佛殿の前左右に建る

瑞聖寺（ずゐせうじ）

選佛場　軒に掲く 黄檗木庵書とあり

聯　當寺三十三世若沖盤書とあり

牌堂額

報恩堂

雲宗筆

大用現前時鉄山鉄壁作通途

全機活我安石火電光猶是遅

當寺ハ寛文十一年辛亥青木甲斐守（と号す）端山居士旨を奉して此地に就て一精舎を営む（當寺是なり）黄檗本師を請して開山とし開堂の日鐵牛和尚ぬしく首座とし秉拂提唱せしむ甲寅秋黄檗和尚再ひ瑞聖に住師に命して分座説法人天悦服す乙卯三月和尚旨を奉し師を以て紫雲の継席とし遠近の道俗来て戒を求むる者指を屈するに[illegible]丁巳春大清主左都督揚大神師の道化を慕ひ三章を贈る（其一に日臨済正宗三十三世　其二日開法長與　其三日鐵牛株印）僧明溪五百大阿羅漢の像五十餘幅[illegible]師の肖像を画く今猶鎮守の宝とし當寺ハ本山の光景を摸擬する所少しく其経営頗る他に異なり江戸黄檗宗最初創建の伽藍なり

妙見大菩薩　同所三丁斗西の方道より左側日蓮宗妙圓寺にあり足利将軍尊氏公の念持佛なりとそ

鎌作観世音　同西の方一町半斗向ふ側六軒茶屋町の角真言宗光雲寺にあり相傳ふ神亀年間行基菩薩諸國遊化の頃信州更級に始て掛錫しのちに平山と云所の池中より此本尊出現あり又空中より化人ありて鎌と御衣木を持て降臨しあひ彼観音の尊像を彫刻し行基に授けたまふ（此本尊の縁起あり）

誕生八幡宮　同所同し側一町斗を隔つ永峯町にあり文明の頃筑前宇美の地より勧請し祭る所の神ハ神功皇后一座なり（本地佛ハ弘法作）別當ハ真言宗高福院と号し八月十五日を祭祀の辰とす

白銀妙見堂
白銀通り
妙円寺

行人坂　同所同西の方目黒へ下る坂を云寛永の頃湯殿山の行者某大日如来の堂を建立し大圓寺と号く　此寺今ハ

般若塚　同坂の半道の側にあり延享三年縁山信楽院の木食心誉一道和尚往来の大地成就のためにとて般若心経三十巻を書写ありて此地中に埋蔵せられし印の碑あり

五百阿羅漢石像　同道の左にあり明和九年壬辰三月二十八日二十九日両日大火に焼死せし者の迷魂を弔ハむかためある人是を建立せしといへり

松樹山明王院　同所坂の側にあり天台宗にして東叡山に属せ本尊阿弥陀如来脇士観音勢至を安置せり開山を栄運法師といふ常念仏の道場にして頗る殊勝なり毎月四日報恩念仏百万遍修行あり　此常念仏ハ西連といへる沙門の発願なりとそ

子安観世音　弘法大師の作にして長州擅浦出現の霊像なり元禄元年六十六部納経の修行者霊夢を感ぜるの後永く当寺に止めおく　しかるに女人難産を救ひあるいハ当寺より御符を出せり又什宝に子安石と云あり　当寺主仙順といへる沙門信州佐久郡三塚村より感得せりと云

辨財天祠　同境内にあり本尊ハ弘法大師の作にして江州竹生島弁天の告によりて彫刻ありしとなり

鎌作觀音

夕日岡
行人坂
明王
行人坂

冨士見茶亭
西南遥にはるけく芙蓉の白峯を望む風繊雲を掃く正に玄冬の色をあらハすとみれハ忽然として又姿を失ふの須臾にして定るかたなく時として其観を改む実に佳景なり
冨士見茶屋

太鼓橋（たいこばし）

夕日の岡　明王院の後の方西に向へる岡をいへり古へハ楓樹数株樹を交へ晩秋の頃ハ紅葉夕日に映し奇観たりしとありされと今ハ楓樹少く只名のみを存せり

大鼓橋　同所坂下の小川に架せり目黒川といふ柱を用ひず両岸より石を畳かさねて橋とす故に横面より是を望めハ大鼓の胴に髣髴たり故に世俗かく号く享保の末木食上人心誉と号す是を制せらるとなりとぞ

霊雲山蟠龍寺　安養院と号す同所橋より一町ばかり西南道より右にあり浄土律にして縁山に属せり本尊阿弥陀如来ハ慈覚大師の作なり開山ハ吟蓮社龍誉一雨霊雲和尚と号す上野國新田の大光院より退隠の後當寺草創ありしとなり境内に丈六の阿弥陀如来の銅像あり又後の方山崖の下に岩窟ありて中に辨財天を安置す弘法大師の作なりとぞ本堂ハ門の向ふにあり惣門の額に安養院と書せしハ黄檗獨湛和尚の筆なりとぞ

臥龍山安養院　能仁寺と号す同所にあり天台宗にして龍泉寺に属せり本尊涅槃釋迦像ハ空誉上人の作なり當寺ハ法華讀誦称名念佛の道場なりとぞ

蛸薬師　同所町家の巽の隅にあり天台宗成就院境内に安ず本尊薬師如来ハ慈覚大師の作なり世俗傳へ云此如来に祈願ある者ハ蛸を断て是を念ずれバ果して利益ありとぞ繪馬にも蛸の形を畫きて捧ぐ

目黒不動堂　同所の西百歩のあまりにあり泰叡山瀧泉寺と号す天台宗にして東叡山に属せり開山ハ慈覚大師中興ハ慈海僧正なりとぞ

本堂不動明王慈覚大師作脇士ハ八大童子なり

本殿額泰叡山後西院御筆　楼門額泰叡山後水尾帝御筆

蟠龍寺（ばんりうじ）
窟辨天祠（いわやべんてんし）

鳥井額 泰嶽山 日光御門主明王院宮御筆

経蔵 一代蔵経を安置せらるゝ釈迦阿難迦葉の像を置 八幡宮 早尾権現 祭神猿田彦大神或ハ素盞烏尊とも云 祭礼ハ五月十五日祭あり 此堂社何れも本堂の左ニ並ぶ 恵比須大黒祠 鐘楼 水神宮 愛染明王

大行事権現 此地の地主神なり祭神高皇産霊尊なり 五月十五日祭礼あり 石不動 何れも本堂の右にあり

稲荷祠 地蔵尊 掌善掌悪の二童子を置 聖観音 閑山堂 聖徳太子

天照太神宮 本地大日如来 本堂の後峙くる山の腰を切割く安置す俗に奥の院と称す 吉祥天女祠

天満宮 鬼子母神 十羅刹女祠 虚空蔵堂 遊軍神祠

何れも本堂の後に並び建てり 結神祠 役小角 女坂の中程にあり銅像にして前鬼後鬼の像あり 三佛堂 弥陀薬師

釈迦等の三尊を安す 子安明神 鬼子母神あり 疱瘡神 粟島明神 石地蔵尊 江島弁天

秋葉権現 六所明神 荒神宮 何れも右の方にあり 二王門入て 辨財天祠の摸あり

地蔵堂 堂内稲王脱衣婆等の像を安せり 観音堂 中尊ハ聖観音廻りに西国坂東秩父の札所百番の観音を安置せり

勢至堂 稲荷祠 前不動 左右に十二天の像を安置す何れも楼門の左の方にあり 楼門 左右に金剛密迹二王の像を置裏に使者犬の像を置り

独鈷の瀧 當山の垢離場なり往古承和十四年當寺開山慈覚大師入唐帰朝の後関東へ下り

鮹薬師堂

同黒飴
此地の名物として是を商ふ家夥し参詣の輩求めて家土産とせ
きりや
桐屋
きりや
桐屋

ありし頃此地に至て独鈷杵をもて此地を穿ち得られたりとて常に霊泉滴々として漲落炎天旱魃といへとも涸る事なく末ハ目黒一村の水田に引用ることあり昔ハ三口にありしとく涌出せしか今ハ二流となれりそのゝち一年此瀧水の涸たりしことありけるに沙門某江島の弁天に祈請しけれハ再ひ元のことくなりしとそ故に今も年々当寺より江島の弁天へ衆僧をして参詣せしむる事怠慢

鷹居の松 旧名白ひ松又腰掛松とも号く石階の下にありて蒼々として

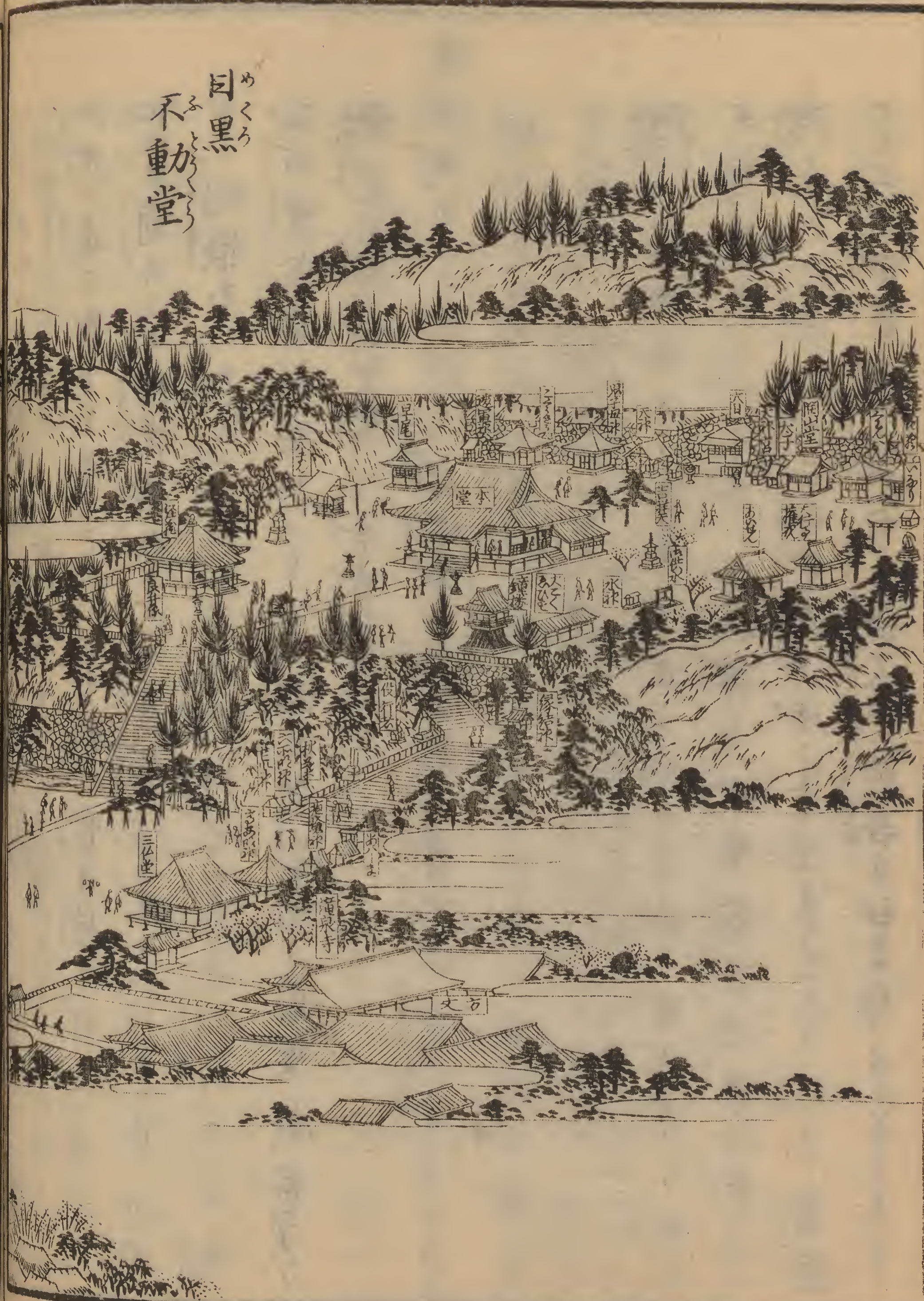
称とあへり和漢三才図会に倶梨迦羅の滝とあり

寛永の頃 大樹此地に御遊猟ありし時其御鷹俄に行方をうしなひ依て別当実栄に仰の旨ありて祈念せしむ然るにたちまち御鷹飛来り此松にとまれり依て賞感あらせられしより此樹に鷹居松の名をたまふといへり

縁起云平城帝の大同三年慈覚大師本国下野国より叡山に赴きの時此地に投宿あり然るに其夜の夢中明王霊示ありて永く此地に跡を垂群生を度せんと曰ふとみて覚しかハ翌日夢中拝する所の尊容を摸して今のなるを彫刻し当山に安置したまふ或人云此地ハ日本武尊を鎮る所なり慈覚大師此地経歴の頃不動尊の像を彫刻して神躰に擬せしむ其故ハ日本武尊駿河にて賊徒放火して尊を襲ふ其時尊の佩たる叢雲の剣を抜て狩犬の綱を切て放ち燃来る草を薙掃ひたまへる其火の中に立せ給ふ形相にも明王の形に似たるを以これに比せしとそ犬を当山の使者とするもこの由緒なりといへとも此説いふかし故に挙へすありとしあるもの千歳の今に甫ふこと理智圓明の威力広大にして迦楼羅焔の徳用深妙なり 元和元年の春此地の総刹火災ありて餝焔御堂に覆ひし時平常なりし猛火を除き此ふとひ滝の下に留りあへ人皆奇なりとす寛永元年大将軍此地に猟したまひ同十一年に再興ありしより結構備りしとそ

此地ハ遥に都下を離るといへとも詣人常に絶ず殊更正五九の月廿八日前日より終夜群参して甚賑へり又十二月十三日ハ煤掃にて開帳あり是も前夜より参詣群をなせり門前五六町か間左右貨食店軒端をつらねて詣人をいこはしむ粟餅飴并に餅花の類ひを鬻く家多し

虚無僧寺 同所門前大路の西にあり普化宗金洗派にして東昌寺と号し又番所と称して本寺あらハあるいは或風呂屋ともいふ 金洗派 活惣派 西向派 安楽派 水戸八箇寺をいふあり惣本寺の番所と唱ふ 浅草廣小路 小金一月寺 牛込早苗田 青梅鈴法寺 芝金杉 神奈川西光寺等あり 雍州府志に虚無空寂を宗とす故に虚無僧と称せ又薦僧とも書り意ハ其徒常に風餐露宿険難を厭はす諸方を経歴し至る所筵薦に座して足りとす仍て薦僧とも云中世暮露と云ありしも職人尽哥合にもましるしともあり

目黒不動堂
本堂
三仏堂
滝泉寺
方丈
門前茶や多し

洛の妙安寺に朗庵といへる異僧あり紫野の一休和尚に親く常に風穴道人と称し尺八を吹きてたのしめり是風穴流の作略を慕ひしなり始宇治の吸江庵に住す世に云ふ所の虚無僧の根寺なり元東福西州風穴道人の門派にてありし一説に普化和尚の流派といへとも風穴の号を取りたるなりとあり明恵上人の華厳和尚兼好法師のつれづれ草等にも出たり

大鳥大明神社　同所不動尊より北の方二町ばかりを隔つ別當は天台宗にして大聖院と号す祭神日本武尊一座なり相伝ふ大同元年丙戌泉州大鳥の御神を勧請しまつるとぞ當社は目黒村の鎮守にして祭礼は九月の九日を例とす此日角力興行あり

按に目黒不動尊に日本武尊の説を交へしは此社を誤りて云なるべし不動尊の条下と合せ見るべし

附ていふ此辺をすべて目黒と号け上中下とわかれて広曠の地なり永禄二年小田原北条家の所領役帳に太田源七郎島津孫四郎等此地を領せしよし記せり其東鑑に建久元年十一月七日の条下に目黒弥五郎といへる名を載す此地より出る人なるべし

金毘羅大権現社　同所二町ばかり西の方通りを隔てゝあり祭る所讃州象頭山金毘羅神と同し當社を以御城南鎮護神と称しまつり九条家染筆の額を蔵す別當は禅宗にして高幢寺といふ境内に難波の梅又曾根の松と称する樹あり

千代が崎　渋谷宮益町より目黒長泉律院へ行道の傍芝生の岡をいふ佳景の地にして永峯に属せり絶景観といふは松平主殿頭の別荘の号にして閑寂無為自然に其地に應ず

高峯山長泉律院　同所六町ばかり西の方にあり浄土宗にして縁山に属す則縁山前大僧正成誉大玄和尚を開創の主とし不能律師第二世たり第三世を徳門和尚とす師の肖像は在世の時弟子恵徴彫造する所なりといへり

本堂　山の半腹にありて丈室を去る事数十間の回廊を架して通ず明和五年戊子初て此仏殿を営建す本尊は上品上生の阿弥陀如来なり座像四尺余慈覚大師の作泉州堺の心蓮寺より請得て修飾を加へあらたに當寺の供像とするよし開山徳門和尚伝の中に見えたり

経蔵　門を入りて左にあり安永七年戊戌落成す律蔵論三蔵および諸師の鈔疏を安置せり　鐘楼　安永元年徳門師建立し又みつから銘を作らる

當寺は宝暦十一年辛巳縁山前大僧正成誉上人大玄和尚といふ久しく律院を創起するの志ありといへとも新に寺を開創する事は官より禁

大鳥明神社

金毘羅社

千代が崎
行人坂の北永峯松平
主殿侯別荘の後中
目黒の方へ少し下る所
なり初鐘が崎といひ
しを後に千代が崎と
改られしといふ主殿侯
構の旧跡にして池の
傍に衣掛松といふ
あるハ新田義興の室
義興矢口の渡しにて
最期のことを聞てかなしみに
堪ず此池に身を
投しとなり絶景
観といへるも
此別荘の号
なりとぞ

長泉律院

ことを故にのせたく事なりとす 不能律師に至て営建既になると ゆゑに成誉上人は續いて逝す 大玄大僧正に寂あり依 師の遺志を奉し法弟千如等百計千慮してこれを企つ川越蓮馨寺主教意上人力を戮せ扶成を再ひ官に告て所請に準するを得て創建落成し号けて長泉院と云 山間より清泉涌出して境内を繞て流るゝゆゑに長泉の号あり 扶費の施主北川氏某てありしに於て

宝暦十三年の夏千如等徳門師を請して當寺に住持せしむ 徳門律師行状記に云く師諱ハ普寂字ハ徳門自ら道光と号す勢州桑名縣増田邑に誕る父ハ一向派源流寺主秀寛母ハ中村氏なり師襁褓をまぬかれてより好んで禮佛誦経の態を作す常児に異にして名緇の相あり三歳字を識り六歳書を讀む凡投る所の経書一受して輙ち記す年をこへて師の学徳既に世におもく知れても三衣一鉢のみ唯身を離さず一銭一米もたくはへ畜ふることなし竟に天明元年辛丑十月十四日化寂を闕 世七十五臘夏三十六其徳化ハあまねく世にあまねし あるハ是を略す又師生平撰述の書甚多くすでに刊するものあり いまだ刊せざるありともに總計四十部百四十有三巻ありと云く

當寺ハ常行念佛の道場にして淅々たる松風はとしなへに梵唄の声を助け去此不遠の秋の月ハ長泉の流にやどる実に清浄無塵の浄刹にして常に寥寂たり